

# 創作、鑑賞の理論

「勝手読み」の視点から

三宅芳雄（企画責任） 岩垣守彦 森田均 金井明人 内海彰 小方孝

## 主旨

創作や鑑賞の過程は認知科学の解明の重要な対象である。これは、創作や鑑賞が人の生活の重要な一部であるからだけではない。創作や鑑賞という文化的な活動にこそ人の認知の本質があると考えられるからだ。このワークショップでは創作や鑑賞のさまざまな理論がどのような性格を持っているのかを根本に戻って検討し、今後の創作や鑑賞の理論の発展を見通すことを試みる。狭い意味での認知過程に限らず、広い視野の中で理論を検討していくことを狙っているが、当面、作品鑑賞における主体的な関わりに焦点を充て、理論的な検討を進めたい。より具体的には、文学作品や映像作品の鑑賞における、「勝手読み」の過程を中心にして、さまざまな側面から理論的な検討を行っていく。

## 作り出す過程の解明

認知科学の基本的な視座の一つは認知過程を「作り出す」過程として解明していくということであろう。このことは創作の過程のように作り出す側面が明らかでない場合だけでなく、鑑賞の過程のように作り出す過程が自明でない場合についても言える。鑑賞の過程には多かれ少なかれ理解の過程が含まれており、そこでは、意図や目標の関与の下に仮説が設定、検証され、理論が作り出されていく。作り出すという視座から認知過程を解明する立場を構成主義と呼ぶことにし、この構成主義の立場を徹底することで、鑑賞と創作の過程が解明できると考える。

創作や鑑賞の理論を構築しようとする研究活動自体が構成の過程であることは言うまでもない。当然、何を意図して鑑賞や創作の理論を作り上げようとするのか、その立場によって、対象の解明の仕方やその結果として産み出される理論は異なってくる。例えば、詩が創り出される認知過程を解明しようとするとき、そこに、客観的な認知過程があるに違いないと考えて研究するのも一つの立場であろう。しかし、なぜその認知過程を解明したいのか、その目的を明確にした上で研究することが効果的な理論の発見、構築に繋がると筆者（企画責任者）は考える。もちろん、優れた詩をいつでも創り出せる魔法の手続きがないのと同じように、優れた詩をいつでも創り出せるほどに背後の認知過程が解明されることは現状では困難だろう。ただ、そのことは、詩を書く認知過程への理解と洞察の深まりが理論という形で「存在しない」ことを意味するのではない。単なる、直観的なメタファーで表現されることの多い「こつ」の集積ではなく、それらが認知過程を捉えるよく整理された枠組みの上に統合されるならば、それは創作に十分なインパクトを持つ理論に成り得るだろう。谷川俊太郎の場合などを見ても、創作について、さまざまな角度から自由に語っているが、そこには創作の背後の認知過程についての貴重な知見や優れた洞察が少なくない。そのような知見や洞察を整理し、認知科学の一般的な枠組みの上に体系づけることで創造や鑑賞についての認知過程の理論が役に立つ形で構築できるだろう。一方、そのような理論構築の過程で、認知科学の基本的な理論構造がよりよく見通せるようになることも期待できる。

## 「勝手読み」について

岩垣守彦

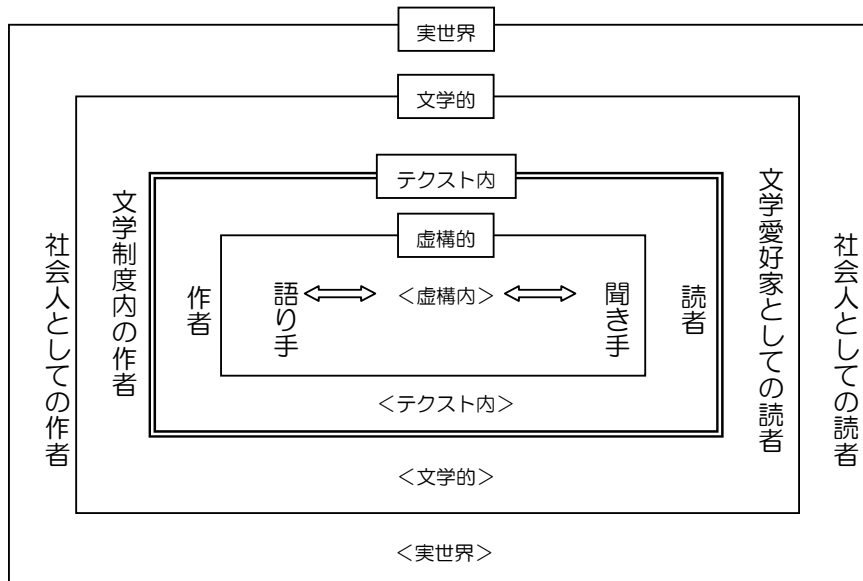
人の創るものの中で多様性を身上とするのは芸術で、創作に同じものはない。どの作品も人の真似などするものかと勝手に創られている。表現手段も無限に多様である。しかし、そのような創作が一つの文化圏だけでなく、他の文化圏にも享受され、多数の受け手に評価されるということは、その多様性には一定の枠組みがありそうである、一人として同じ人間はいないにもかかわらず、すべての人が人間であるという身体性から逃れられないように。

文学の場合、創作が読者に評価されるには、論理的・心理的納得をもたらす事象配列と情緒的納得をもたらす表現技巧が必要である。したがって、一昔前には、「読む」ということは作品を分析をして論理的納得・心理的納得をもたらす構図を解明することや情緒的納得をもたらす技巧を明らかにすることであった。その根底には、作品は作者のものという考えがあったからである。たとえば、ジョージ・スタイナーは、自伝 **ERRATA--An Examined Life** (『G. スタイナー自伝』工藤政司訳・みすず書房) の中で、「文学の場合で言えば、言語的・歴史的知識が備わり、多義的でたえず変容する言語の性質に理想的な感受性をもち、鋭い直観力を駆使して感情移入のできる優れた読み手でも、彼らはしかし原作に「肉薄した」にすぎない。説明された詩や散文の究極の生命力、時間に逆らうそれらの力、は手つかずのまま残る。どんな解釈もその対象には匹敵しえない。分析と「解剖」や、パラフレーズないし感情描写によるどんな再叙述も原作を置き換えることはできない」(p.29) と「読み」の限界を述べている。

しかし、「読む」という行為は、本質的にいって、作者に「肉薄すること」ではなく、作者がどのような意図で創ろうとかかわりなく、読者が「言葉」を読むということであり、それは「言葉」に対する読者の内的資源で勝手に「イメージ」を組み合わせて感動するということである。いふなれば、「読み」は「言葉」に基づく読者の「内的資源による概念とイメージの創作」、つまり、読者の「創作」である。したがって、「作品」の評価は「作者に何か言わんすることがあって、それがいかに巧みに表出されているか」にあるのではなく「言葉を手がかりに読者が内的資源で組み合わせると、どんなに心を刺激する作品になるか」によって決まるのである。その場合、作り手と読み手を結ぶものは、「言葉を使う動物」(人間) という身体性であり、集団生活者たる人間を支える「語り」(事象の伝達、事象を通して概念・感情の伝達) である。その「語り」の基本は「動物」にまでも共通する、言語を超えた「情動と衝動の物語化」であるにちがいない。このような思考に基づいて実際の作品から抽出された「物語原型」や「原型的事象(エピソード)展開」と「表現方法」を組み合わせると、「創ること」と「読むこと」は同じルールの中にあるように思われる。

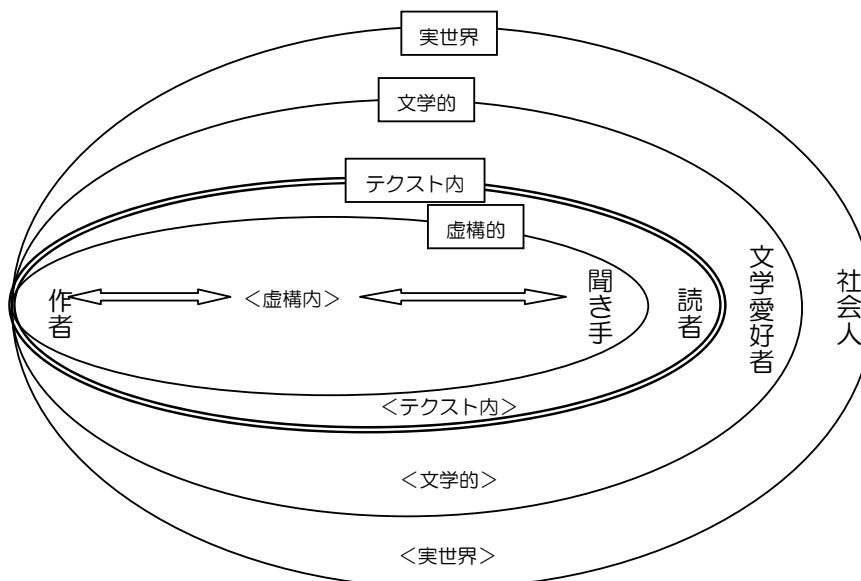
# 勝手読みのために

森田 均（長崎県立大学）



上の図は、Waldmann(1976)によるテクスト内コミュニケーションの基本図式を一部簡略化したものである。テクスト内在美学の特徴でもあるが、作者と読者のコミュニケーションをテクストの内側と外側で区別している。この考え方は筆者が提唱したコンセプトと通じるころはあるが、ここでは最も外側にある**実世界**コミュニケーションよりも内側にある**虚構内**コミュニケーションの方がより上位の階層として位置づけられており、<文学的>メッセージを交換する送り手及び受け手と<テクスト内>メッセージのそれとは設定が異なる。そこで、下図に示したような変更を加えたモデルを提案したい。これによって固定された役割分担とメッセージが階層を越えてやり取り出来るようになる。現実には同一の人間が担うことになるが、受け手側を重層化させることによって多様な受容の可能性を示すことも出来る。つまり、勝手読みに寄与するモデルとして、また内と外のレトリックの延長として提示するものである。

[文献] Waldmann, Günter: Die Ideologie der Erzählform, München : W. Fink, 1976.



# 映像認知をめぐって

金井明人

(法政大学社会学部)

送り手はどのように映像の諸要素を連鎖させて映像を制作しても良いし、受け手はそれにどのような視点から接しても良い。映像には文法がない、とも言えるためである。それぞれの映像作品に、対応する唯一の視点があるわけではない。

図1は、大教室で、カール・テオドール・ドライヤー監督のサイレント映画、『裁かるるジャンヌ』(1928)のオリジナル版96分を全編、伴奏付で144人の大学生に見せた後、何に特に注目して見ていたかを、複数回答可の自由記述によって調査した結果である。「表情」に注目している受け手が多く、「ストーリー」に特に注目している受け手は少ない。また、その他の事項も多数挙げられている。映像は多様な見方を提供できるのであり、この多様性がなぜ生じるかを考察することも、重要な課題になる。

『裁かるるジャンヌ』には、一貫したストーリーが存在するが、ジャンヌのクローズアップを多用し、傾いた構図、白や影の強調など、独特のショットが続く。人物の空間関係もつかみにくい。奥行きなども十分に示されない。上下が反転したショットもある。ストーリーをわかりやすく提示することをこの映像の修辞では目的としていない。とはいえ、受け手が共通の認知処理を行っている部分もある。この映像でも、前述の受け手内で調査したところ、ストーリーを理解できなかった人は17%にとどまった。

映像を認知するにあたって、受け手には認知的な制約が多くあり、そこから逸脱することは難しい。ストーリーがあればストーリーを追ってしまうし、人がいれば人を見てしまう。また、その中でも特に人の顔を見てしまう。動きや光などにも引き付けられてしまうし、連続したショットがあれば、その共通性を探ってしまう。そして、多くの場合、画面の中心を見るので、細部を見るだけの処理能力がない。そもそも、2次元の映像を、現実世界の反映として見てしまうこと自体も制約であるだろう。だが、認知の世界を、そして映像の世界を広げていくためには、これらの制約を、僅かであっても、緩和していくための論理も重要になる。『裁かるるジャンヌ』は、認知的制約を強く利用した映画であるが、その多重性が逆に、ストーリー理解に関する制約を緩和させる場合があり、表情を筆頭としたストーリー以外の要因による、強い効果の発生につながっている点は興味深い。

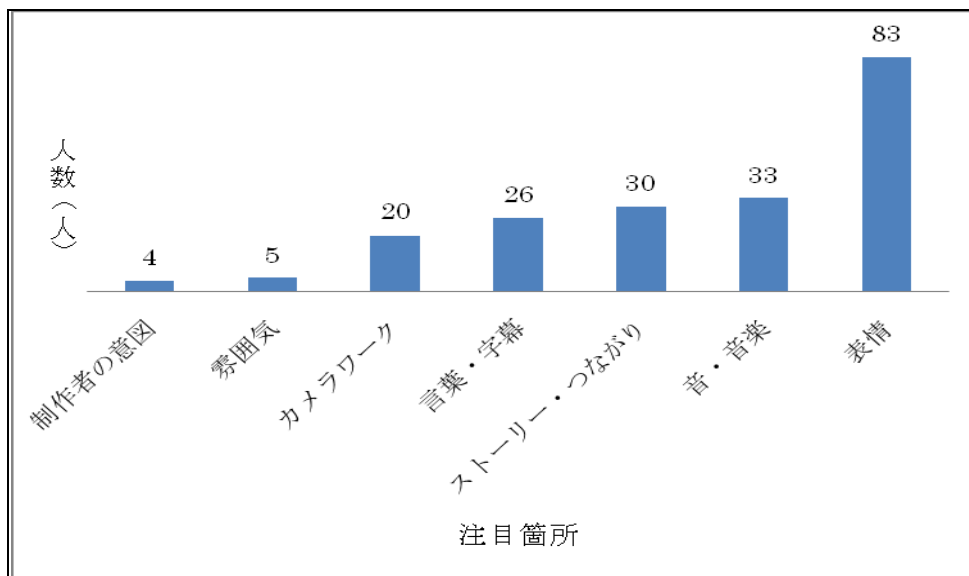


図1 『裁かるるジャンヌ』で何に注目して映画を見たか

# 聞き手は修辞表現を自己中心的に解釈するのか？

## - アイロニーにおける自己中心的処理 -

内海 彰（電気通信大学）

### 1 言語理解は他者中心的か自己中心的か？

言語コミュニケーションの理論では、聞き手（読み手、受け手、読者）と話し手（書き手、作者）の協調を仮定する。Grice (1989)によると、「この料理、おいしいね」という発話をアイロニーとして理解するとき、話し手が協調の原則や質の公準に違反する意図がない、話し手は聞き手がアイロニーと解釈することを十分予測できる、話し手は聞き手がこのように解釈することを阻止していない、というような話し手の意図や信念を聞き手が推測していると考えられる。Sperber & Wilson (2002)も、Griceの仮定するような汎用的な読心能力は必要ではないが、関連性の原則に基づくコミュニケーションに特有の読心能力が発話解釈を支配すると考える。

しかし、我々の直観からすると、特に修辞・文彩表現や文学などを鑑賞する場合には、必ずしも話し手の意図や信念を考慮しているとは考えにくい。どちらかと言うと、読者（聞き手）は自己中心的に自由に解釈を楽しんでいる。実は、最近の言語心理学の研究において、これを支持する結果が得られている。Keysar (2007)は、さまざまな実験を通じて、聞き手は必ずしも話し手の信念や意図を考慮しない（聞き手の信念をそのまま話し手の信念とみなす）で言語理解を行うことを示した。つまり、我々の言語理解は他者中心的（allocentric）ではなく、自己中心的な（egocentric）方略に基づいているのである。

### 2 アイロニーも自己中心的に処理される

アイロニーは、メタファーなどの他の非字義的な表現と異なり、言語表現上にアイロニー性を示す標識を持たない。必然的に、聞き手がアイロニーかどうかを判断するためには、話し手の状況認識や信念（話し手の期待や語用論的不誠実性 (Utsumi, 2000)）を知ることが不可欠である。「この料理、おいしいね」がアイロニーであるかどうかは、話し手がその料理をどのように認識し（おいしいかまずいか）、それに対してどのような態度を持っているか（称賛、なぐさめ、非難）を推測しなければ判断できない。このような他者中心的な理解方略は、読心能力とアイロニー理解能力の相関を示す多くの研究 (e.g., Happé, 1993) から支持される。

しかし、アイロニーの理解についても、自己中心的な処理が行われることを示す実験結果がいくつか得られている。Keysar (1994)は心理実験を通じて、語用論的不誠実性（料理がまずいという状況と発話内容の不一致）を

話し手が認識していないことが聞き手に明らかであっても、その聞き手はその発話をアイロニーと認識してしまうことを示した。さらに、秋元・邑本 (2007)は、聞き手の自己中心的な視点からの語用論的不誠実性の認識だけでアイロニーらしさの判断が行われ、話し手の状況認識はその後に考慮されることを明らかにした。

筆者が提案しているアイロニーの暗黙的提示理論 (Utsumi, 2000)は、このような自己中心的なアイロニー理解を説明することができる。暗黙的提示理論では、アイロニーの成立に必要な状況設定としてのアイロニー環境と、言語表現に関わる特徴である暗黙的提示を分けて考える。（実はこれが誤解のもとにもなっているのであるが。）アイロニーらしさの認識はあくまでも発話がどのくらい暗黙的提示をしているかを計算するだけであり、アイロニーらしいと判断されて初めて、アイロニー環境が成立するか（話し手の状況認識がどうであるか）を推測するのである (内海, 2000)。このことは、Utsumi (2004)による心理実験でも支持されている。つまり、アイロニーの表現上の違いはアイロニーらしさの評定に影響を与えたのに対して、状況設定の違いはアイロニーらしさの評定には影響を与えなかったのである。

要するに、アイロニーでさえも、自己中心的な処理が行われている可能性が高いのである。

### 参考文献

- 秋元 頼孝, 邑本 俊亮 (2007). 認知的負荷がアイロニーの判断に及ぼす影響 — アイロニーらしさの知覚は自己中心的視点から生じるのか —. *認知科学*, 14(3), 292-302.
- Grice, H. (1989). *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press.
- Happé, F. (1993). Communicative competence and theory of mind in autism: A test of relevance theory. *Cognition*, 48, 101-119.
- Keysar, B. (1994). The illusory transparency of intention: Linguistic perspective taking in text. *Cognitive Psychology*, 26, 165-208.
- Keysar, B. (2007). Communication and miscommunication: The role of egocentric processes. *Intercultural Pragmatics*, 4, 71-84.
- Sperber, D. & Wilson, D. (2002). Pragmatics, modularity and mindreading. *Mind & Language*, 17(1/2), 3-23.
- Utsumi, A. (2000). Verbal irony as implicit display of ironic environment: Distinguishing ironic utterances from nonirony. *Journal of Pragmatics*, 32(12), 1777-1806. Reprinted in Gibbs, R.W. & Colston, H.L. (Eds.) (2007) *Irony in Language and Thought* (pp. 499-529), Lawrence Erlbaum Associates.
- 内海 彰 (2000). アイロニー解釈の認知・計算モデル. *情報処理学会論文誌*, 41(9), 2498-2509.
- Utsumi, A. (2004). Stylistic and contextual effects in irony processing. In *Proceedings of the 26th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, pp. 1369-1374.

# 流動と固定

小方 孝

文学作品（ここでは特に小説を想定する）が作品として完成するということと、逆に完成しないということとを巡る問題をここでは考察する。完成しているということはいわば固定であり、それに対して完成していないということは流動と言える。固定された作品の中に流動を見出すという考えは、様々な形で見られる。例えば、最終的に固定された作品というものを想定し（作者によって公刊された形態である）、しかしその陰に流動的な作品への過程が潜在するとし、作者による推敲、手直しの過程を洗い出そうとする批評の形態がある。また、ここに見られる作者という制約を外し、ある作品が歴史的に辿る流動の変遷を跡付けようとする方法は、文学研究のひとつの王道である。さらに、このようなどちらかと言えば作り手側からの接近ではなく、受け手、読者側からの接近は言うまでもなく近年の流行であり、ひとつの仮に固定されたと想定される作品が読解を通じて流動の相を帯びるという考えは、既に固定化された物語となっていると言える。

このような文学作品の固定と流動を巡る旧来の思想や研究に対して、「物語生成システム」による作品制作とは何か、という主題を直接に据えた検討を行なおうとする時、問題はより即物的な色合いを帯びて来る。無反省に「物語生成システム」による制作行為の形態を考えてみれば、それは時に応じて異なる物語（小説）を多様・柔軟に生成する機構としてイメージされる。この場合「物語生成システム」の特色は、常に流動的であるということである。しかし逆に、想像力を拡張することによって逆に現今の人間による文学作品の制作行為に近付いた在り様、つまりひとつの完成形態をめざして推敲・手直しを進める存在としての「物語生成システム」というものを考えてみることもできる。私自身の感覚を言えば、このような作品における流動と固定のいずれかに密着することを常に回避する迂路を辿って顛動し続けている、というようなものである。しかしそのこと自体は、冒頭に述べた文学研究や文学思想における流動と固定を巡る様々なあり方のひとつに回収されてしまうようなものでしかない。

そこで私が今後考えて行きたいのは、何らかのいわば即物的な方法で、流動と固定の両者を包含した「物語生成システム」による作品制作の形態を探って行くことである。「物語生成システム」が流動的に多様なテキストを柔軟に生成するという能力を最大限に発揮する機構として実現された時、同時にその流動性が一瞬にして固定化されるような、そうした方法である。これは今のところ、論理的に明晰な目標として存在するのではなく、単なるイメージとして存在するに過ぎないものである。つまり、何をめざして考えているのか、自分にもなかなかわからない。同時に、強引に即物的な形で実現することによって、このイメージにある形を付与して行くことが、当面の課題である。